

氏 名	イ 李	ウン 恩	ミ 美
学 位 の 種 類	博 士	(文化財)	
学 位 記 番 号	博 美	第 342 号	
学位授与年月日	平成23年 3 月 25 日		
学位論文等題目	〈作品〉「朝鮮唐津水指」(出光美術館所蔵) 模作 〈論文〉朝鮮唐津伝統技法研究－出光美術館所蔵「朝鮮唐津水指」の模作を通じて－		
論文等審査委員			
(主査)	東京芸術大学	教 授	(美術学部) 島 田 文 雄
(論文第1副査)	〃	准教授	( 〃 ) 片 山 ま び
(作品第1副査)	〃	教 授	( 〃 ) 豊 福 誠
(副査)	〃	准教授	( 〃 ) 辻 賢 三
( 〃 )	出 光 美 術 館	学芸員	金 沢 陽
( 〃 )	東京芸術大学	教 授	( 〃 ) 永 田 和 宏

(論文内容の要旨)

唐津焼と15～16世紀の朝鮮陶器の関連性については、これまで様々な議論がなされているが、その中でも朝鮮唐津に関する研究は極めて少ない。

朝鮮唐津は、黒釉と藁灰釉を用い、叩き技法で成形した袋物に施釉し、その用途は茶道具を主としている。その生産年代については、帆柱窯から出土していることから、およそ最初期の1580年代から製作されていたと考えられる。従来の研究では、このような朝鮮唐津のルーツに関する研究が中心であり、朝鮮唐津の発展過程やその発達に影響を及ぼした南・北部朝鮮陶磁の技術、あるいはその用途・意匠など当時の日本での生産環境などの要素や関連性については、まだほとんど論じられているとはいえない状況である。本論では、出光美術館所蔵「朝鮮唐津水指」の再現制作を通してその成形技法、作風、用途などの特徴や技術の発展過程、また日本独自の要素との関連性について考察した。朝鮮唐津の技法は唐津焼の開窯当初から用いられたが、装飾技法として求められ本格的に作られたのは文禄慶長の役以後からであると思われる。また朝鮮唐津の生産は、17世紀初頭の開窯である藤ノ川内・阿房谷窯にほぼ集中している。

唐津が大きく影響を受けた朝鮮の陶磁器技術は15～16世紀のものであり、特に朝鮮唐津の場合、用いられている叩き技法と黒釉から朝鮮時代南部地域の技術の影響を受けたと考えられる。

朝鮮の陶器とは、粉青沙器・甕器を指し、地域環境、流通との関係により朝鮮南部地域に集中している。唐津に伝わったそれらの技法のうち、叩き技法は甕器の代表的な技法であり、現在唐津に伝わっている道具や工程がそのまま残っている。それと、初期朝鮮唐津の袋物の形態が甕器のそれとたいへん類似している。また黒釉の場合、唐津黒釉と朝鮮の鶴峰里の黒釉の分析結果成分が近似しており、灰をベースにした石灰釉であることがわかった。このように朝鮮唐津の制作技術や窯構造は南部地域とも深く関連付けられ、おそらく北部だけではなく、南部の陶工の流合もあったことが考えられる。しかし混ざり合った南北の技術は日本の生産環境により発展し、特に朝鮮唐津はその特徴が受け入れられ、茶陶として日本独自の意匠を出現させた。また、朝鮮唐津の背景や関連性を考察する過程で、成形技術、釉薬、焼成など朝鮮唐津の技法的な検証を行うための実験を試みた。さらに資料を収集し、その比較をもとに再現制作を行った。以下にその実験の結果をまとめる。

### ① 釉薬実験

まず釉薬は黒釉、藁灰釉の2種類があり、それぞれに分けて調整実験を行った。2つとも釉薬分析データを基準とし、ゼーゲル式を用いてより正確な結果を求めた。

黒釉では、南部朝鮮の黒釉との関連性を想定し、15世紀末に開窯した忠清南道鶴峰里の粉青沙器窯跡出土の黒釉と唐津黒釉の成分分析データを比較した結果、石灰を用いた典型的な石灰釉系であることがわかった。また藁灰釉は、再現作品である出光美術館所蔵「朝鮮唐津水指」の特徴を基準として融点が比較的低く、青みを帯びた釉薬の制作を試みた。

このような換算結果とテストの比較により、黒釉は天草陶石35%、釜戸長石20%、伊勢久土灰45%に外割り弁柄8%の割合が唐津・鶴峰里黒釉のデータに最も近く、藁灰釉は藁20%、丸二天然土灰30%、釜戸長石50%の割合で調合すると、色や釉調が最も適すると判断した。

### ② 施釉実験

藁灰釉は黒釉に対し融点が高いため、焼成は藁灰釉を溶かしながら黒釉が流れすぎないように厚みを見極めることが重要であった。厚さによる釉調の変化を実験し、黒釉は2mm、藁釉は5mm程の厚さが適すると判断した。

### ③ 焼成実験

焼成方法としては作品の特徴から1260℃ から1280℃まで30分程で温度を上げる方法を試み、近似する釉調が得られた。

上記の実験や考察を踏まえたうえで釉薬の施釉・焼成実験を試みた結果、当時と現代の窯が異なり、焼成原料、規模、焼成時間の違いにより光沢の度合や釉調などに微妙な差が生じたが、釉薬の厚さ黒釉2mm・藁灰釉5mm、焼成温度1280℃、中性焼成で実物に近い結果を得ることができた。しかしこれは限られた原料や設備による結果であり、もっと多様な原料や背景考察を通じた研究が必要であると考え。

本研究では、15～16世紀の朝鮮時代の陶磁器と朝鮮唐津の制作技術や窯跡の関連性、また日本独自の技術や意匠の混合による発展の過程を史料の調査・比較を通して考察した。出光美術館所蔵「朝鮮唐津水指」の再現制作により、当時の窯や焼成、また制作技術について検討し、朝鮮時代の南部地域の黒釉と唐津の黒釉との類似性、唐津焼における焼成技術の進化など新たな知見が得られた。今後の研究課題として、唐津に伝わった技術の一つとして古い歴史や多様な特徴を持っているにも関わらず、情報が乏しい朝鮮時代の黒釉は北朝鮮の藁灰釉や窯と共に唐津との関連性に関して論じられる部分であると考え、今後の研究課題としたい。

(博士論文審査結果の要旨)

九州は佐賀の地に生まれた唐津焼のなかでも、黒釉と藁灰釉が美しい白黒のコントラストを織りなすものを特に「朝鮮唐津」と呼ぶ。この朝鮮唐津については、名称の由来や生産技術などに未解明の点が甚だ多く、唐津研究が進むなかでもやや取り残されてきた感がある。李恩美氏は韓国出身の留学生であるが、この自らの祖国の王朝の名が冠された朝鮮唐津の再現を試み、その謎のいくつかにせまる結果を導いた。

博士論文の構成は、朝鮮唐津の成立背景、朝鮮時代の陶器との比較考察、実際の復元過程の大きく3つからなる。朝鮮唐津の成立背景については、現在までの考古学・美術史における研究成果を踏まえ、唐津焼と朝鮮時代の陶器について概観を行っている。朝鮮唐津と朝鮮時代の陶器との比較考察では、朝鮮半島でも北方地域の影響が強いとされてきた従来の学説に対し、南方地域の陶器にも朝鮮唐津に等しい黒釉や叩きなどの技術があることを指摘している。復元過程においては、釉薬や焼成の実験データを

細かく論じ、その再現過程を論じた。

この論文の大きな意義は、朝鮮陶磁からの具体的な影響を明らかにした点と、唐津焼における内在的な技術発展過程という二つの要素を明かしたところにある。つまりは影響のみを強調して終わらず、朝鮮唐津の造形原理にせまりうる視座を打ち出した点に学術的価値を見出すことができよう。

まず影響関係においては、唐津の黒釉が韓国の鶴峯里窯跡と各成分の割合が似ており、相互に近いという結果を導き出した。これは従来から根強い北方影響説を覆すひとつの根拠となりえる。また藁灰釉が唐津のなかで黒釉と合わせることを念頭に、より低い融点を目指して開発が続けられたこと、可能な限り灰被りを防ぐために窯内に置く位置に細心の注意がはらわれたこと、焼成室でも後方に入れられたこと等をつぶさに論じている。

特に後者の釉薬の調合や焼成に対しての考察は、美術史・考古学の双方にとって驚きをもって迎えられるであろう。多くの美術史・考古学の研究者は朝鮮唐津こそは粗放な製造過程によるものと考えてきた。しかし朝鮮唐津の器形を顧みれば、日常雑器ではなく、懷石道具や水指など当時の高級品にその影を色濃く留める。茶の世界において、朝鮮唐津が完成を遂げる17世紀初は、野趣ある侘びた造形から一歩脱け出して、大胆でありながらも洗練された造形が好まれた時代であった。とりわけ朝鮮唐津に見られるような片身替りの意匠は、当時の先端を行く造形でもある。李恩美氏の研究で明らかにされたように、朝鮮唐津が白と黒との美しいコントラストを器に描きだすため、あくなき釉薬の調合の探求と、焼成過程の試行錯誤を経たものであったとすれば、朝鮮唐津をもはや粗放な造形とのみ評価することは間違いであろう。そこには朝鮮陶磁の技術を生かしながら、当時の美意識の極みにかなうための無名の陶工たちの努力があったのであり、李恩美氏はその作業を通じて物云わぬ彼らの歴史を掬いあげたとも言える。胎土や釉薬の詳細な成分分析や当時の窯構造の再現などまだまだ多くの課題は残されているが、今後、朝鮮唐津の造形を考えるうえで大きな一石を投じたという点で、本論文を博士号授与に相当するものとしたい。

#### (作品審査結果の要旨)

朝鮮唐津には、使用された釉薬とその作風に、韓国ではみられない独自の特徴がある。その点に着目した筆者は、「朝鮮唐津水指」の再現制作を通し、韓国人留学生ならではの日韓両国にそのルーツを探る考察を展開し、朝鮮唐津の面白みを再認識させる興味深い論考となった。

出光美術館所蔵の「朝鮮唐津水指」は、同館の数多く所蔵する、同種の朝鮮唐津と比較しても、気品と力強さをもった逸品である。口辺部に制作途中に出来た傷があるものの、それが力強さに加味している様にも思われる。灰釉系の作品の再現は、砂丘に描かれた風紋に同じ紋様を見つけ出す様な、困難な作業である。筆者のその困難に立ち向かう姿勢が、十分窺える取り組みであった。

再現のために行った、実物の検証において筆者は、多くのデータを読み取っている。特にこの作品からは、制作に携わった陶工の、熟練した技と、無駄のない作業手順をうかがい知ることが出来、その手順を忠実に実行と共に、数量的に図る事のできない、作品の持つ雰囲気への再現に力を注いでいる。

胎土は現在使われている唐津土から、焼き上がりの色、粒度、質感の見合う物をテストを重ね選定した。釉薬は、過去の研究データを元に、ゼーゲル式を作り、藝大陶芸研究室で現在使用している原料による再現を試みた。膨大な試験を繰り返し、瀧 治陽先生(陶磁原料学講師)の指導を得て、現状まで達成する事ができた。原料に関しては、より細部に亘る検証と選択の必要性も感じるが、筆者の試みた方法も一つの方向性を示した。

再現作品の焼成は、登り窯(取手校地)による焼成実験から始めたが、薪窯焼成では、温度上昇、炉内雰囲気等の管理が難しく、常に不安定であり、同一条件で焼成を重ねる事は不可能であった。そこで、温度と炉内雰囲気の管理が、安定的に行える電気炉に切り替えて、焼成実験を重ねていった。電気炉に

よる実験結果が完了した後、最後に登り窯による焼成を行って焼成実験を終了した。

これらの精力的な取り組みにより、再現作品が実物にかなり近づいた結果を得たことは高く評価できる。又、この論文に著された、多くのデータが、今後の研究に役立つ事は、本研究の成果であり、博士号授与に相当すると認められる。

#### (総合審査結果の要旨)

朝鮮唐津は朝鮮陶磁の特徴をそのまま受け入れたのではなく朝鮮の技術を受け入れ、日本独自のものとして発展した。本研究は「朝鮮唐津水指」の再現制作を通して朝鮮唐津と朝鮮時代の陶器の技術の関連性を探った。朝鮮唐津の特徴の藁灰釉だけでなく黒釉と叩き技法を研究対象に広げ、南部朝鮮の関連性を推考した。論文は第1章「朝鮮唐津水指」の成立背景、唐津焼の概要、窯跡と技術の考察。第2章15～16世紀の南部朝鮮時代の窯跡、甕器窯跡調査と文献による北部地域の調査を通じて朝鮮陶磁技法研究、朝鮮陶磁器について論考。第3章は朝鮮唐津様式と南部朝鮮の比較しながら相互の影響を考察している。朝鮮道具の名称の比較、現存する器物に表されている叩き目の比較、窯構造、成形技法の差異など専門的見地から比較した。朝鮮唐津制作技法や窯構造は北朝鮮だけではなく、南朝鮮との関連が深く関わり。南部の陶工の合流もあったと考察している。南北両者が混ざり合った朝鮮時代の陶器の技術は日本の風土に適応し発展していった。朝鮮唐津はさらに茶陶として発展した。「朝鮮唐津水指」の環境は17世紀の茶道具の発展とともに「和物志向」に従った茶人趣味へと変遷した。第4章「朝鮮唐津水指」とその復元、「朝鮮唐津水指」作品調査、復元制作、釉薬、焼成を現代陶磁技法に基づいて制作した事をのべている。復元制作にあったって基本的な方針は現代科学を駆使した方法で復元を試みている点が、本研究の特徴である。復元制作は現地の原料を使いその当時の窯を再現して制作すればある程度の成果が得られるのであるが、本研究は全く別な原料で復元を試みている点において大変意義のある研究と言える。しかし何百年と培われた唐津焼の「朝鮮唐津水指」復元制作は研究者の博士課程の研究期間で体得することは大変な困難なことである。研究者は薪窯による焼成実験、電気窯による客観的なデータの収集等、精力的にこなして来たが、この論文における制作過程での見地が、ごくわずかであるが一般の見地から外れたような点があるが、拾数回の研究者の実験結果を尊重したうえでの結論であると認められる。本研究は「朝鮮唐津水指」の歴史的見地、15世紀から16世紀ころの朝鮮半島の陶磁産地の調査を通じての日本と朝鮮の歴史的陶磁文化研究と陶磁技法、特に現地での研究や道具の名称などは韓国人留学生ならではの研究と認め、制作者としての見地から比較研究された内容であり、密度のある論文と評価する。復元制作では現地の原料など一切使用せず、ゼーゲル式を用いた釉調合実験や酸化鉄のみの発色を試みるなど、化学的な面からの実験、電気窯によるデータの蓄積、登り窯による焼成実験など意欲的な研究活動を通じた成果は高く評価できる。朝鮮陶磁と朝鮮唐津の比較研究など内容のある研究である。よって本研究は博士号授与に相当すると認められる。